



### テクノロジーの 進歩と在宅医療

先日、胃瘻（いろう）

カテーテルを留置している女性患者がカテーテル留置付近を痛がっていました。胃瘻とは栄養を口から取ることが難しい方が、体表からお腹側の胃壁までの道、瘻孔を手術で作りますが、そこにカテーテルを抜こうとした

のですが、必要なデバイスと無事にカテーテルが引き抜け、患者さんがお腹の痛みがなくなったと言ってくれた時には私もほっと胸を撫で下ろしました。その後は新しいカテーテルを入れ直し、



松原 清二 医師

在宅療養支援診療所「まつばらホームクリニック」院長  
総合内科専門医・循環器内科医  
・日本循環器学会専門医  
・日本内科学会認定医  
・認知症専門医  
・認知症サポート医

スを使用してもヒクリと  
もせず、患者さんは大変  
お腹を痛がっていました  
これは困ったと、外科  
の友人にテレビ電話を  
し、状況を説明したとこ  
ろ、それならばとテレビ  
電話を介して、カテーテ  
ルを引き抜くべき力、デ  
バイスの使い方のコツを  
教えてくれました。そこ  
で、改めて指導を受けな  
がらじわじわとカテーテ  
ルを引き抜きました。ズ  
いきました。

【まつばらホームクリニック】  
☎042-439-1250  
西東京市東町 4-14-18-2F  
(訪問中のため不在が多い)

■電話対応：午前 9:00 ~ 午後 6:00  
■定休日：土日（祝日は診療）  
■訪問地域：西東京市、東久留米、  
新座、練馬の一部

まつばらホームクリニック 検索

ルを留置をし、そこから  
栄養を入れる方法です。  
通常はトラブルが起き  
ることはないのですが、  
何かしらの原因で瘻孔か  
らカテーテルが飛び出し  
てしまい、そこに栄養を  
入れてしまった場合、お  
腹の中にある本来は無菌  
の腹膜に散らばってし  
まって腹膜炎を起こすこ  
とがあり、注意を要しま  
す。

最近では遠隔で5G回線  
を使用してもロボット手術  
を行うことも考えられて  
います。このようなテク  
ノロジーの進歩の中で高  
齢社会になり、病院通院  
が困難になる方は増える  
ことが予想されます。

このようにデジタルデバ  
イスをうまく使い、自宅  
でも医療の質を保つこと  
が大切であると改めて思  
いました。